

「自分の話していることがわかっているのか？」

ハンス・ヴァルター・ガブラー

小野瀬宗一郎 訳

[於成城大学ガブラー講演原稿2023年10月15日]

よく言われるように、ジェイムズ・ジョイスは『ユリシーズ』を書いた。この言い方は、事実在即して言えば、正しい。それでも、それはショートカットなのだ。この言い方は、複雑な網のように同時に連鎖する思考および文章化の過程を、彼が『ユリシーズ』を「書いた」という過去形の一語をもって、一つの物質的な成果物に圧縮してしまう。ジョイスの（あるいはどんな作家や著者の）思考および原稿作成における言語生成の過程が、保存のために書かれた物質的な記録を生んだこと、そしてこの記録が現存することは、我々が手にしているテキストの伝承における前提条件なのだ。執筆の物質的な記録は往々にして、著者が書いたテキストとして最初に具現化した状態から派生したものとして我々に伝わるに過ぎない。ジェイムズ・ジョイスに関しては、一連の初期段階の文章——つまり自分の手あるいは代筆者や植字工によって紙に記されたもの——の大部分は残っている。ジョイスによる創作と執筆の物質的な記録は、ジョイスの手による草稿と清書稿からタイプ稿と校正刷りに至るまで、一連の段階を経た系統として存在し、相互に派生して増殖する場合が多いが、これに加えて他者の手による転写がある。基本的にタイプ稿や校正刷りはタイピストや印刷所の植字工が手掛けたものだ。それとは対照的に、異同つヴァリエーションまり現存するタイプ稿や校正刷りに上書きされたテキストの改訂は、ジョイスの手によるものである。

『ユリシーズ』の第九挿話が三分の一くらい進んだ場面では、ステューヴン・デダラスが聴衆となるダブリンの国立図書館の図書館員たちに向けて、『ハムレット』の持論を得意げに披露している。彼はシェイクスピアの晩年の作品の主人公の娘の名前を挙げ、『ペリクリーズ』においてペリクリーズの娘マリナーが父親を探していることを想起する。刊行された初版のテキストでは、ステューヴン・デダラスがダブリンの図書館員たちに向けて披露する話の一部は次の通りである。

——マリナーは、ステューヴンが言った、嵐の子さ。ミランダは奇跡で、パーティタは失われたもの。失われたものが彼のもとに戻った。彼の娘の子供が。「わがいとしい妻は」とペリクリーズが言う、「この乙女のようにであった」と。その母を愛さずに娘を愛する男がいるだろうか？

——祖父となる術、とミスタ・ベストがつぶやいた。「祖父とな…」

——天才というあの奇妙な代物を持つ男にとって、物質的なものであれ精神的なものであれ、あらゆる体験の基準となるのは自分自身のイメージだ。この魅力が彼を引きつける。自分と血を分けたほかの男性たちのイメージには嫌悪をおぼえる。それらに、自分を予告したり反復したりする自然の醜悪な試みを見てとるんだ。

画像1：初版の刊行本

[引用部の和訳は、ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』丸谷才一・永川玲二・高松雄一訳、集英社文庫ヘリテージシリーズ（2003）を参照した。]

学術編集版を編纂するにあたり、異同の場合もあるかもしれないが、伝承されたテキストの記録の全てを網羅しなければならない。ジョイスは、小説の挿話を一つ一つ執筆するにあたり、それなりに挿話の形が固まったと判断した後に、草稿を清書した。清書稿では、該当箇所のテキストは次の通りである。

——マリナーは、スティーヴンが言った、嵐の子さ。ミランダは奇跡で、パーディタは失われたもの。失われたものが彼のもとに戻った。彼の娘の子供が。わがいとしい妻はとペリクリーズが言う、この乙女のようにであったと。その母を愛さずに娘を愛する男がいるだろうか？

——祖父となる術、とミスタ・ベストがつぶやいた。

——彼は娘のなかに、おのれの青春を思い返ししながら、別のイメージの生まれ変わりを見ないだろうか？

自分の話していることがわかっているのか？ 愛。そう。すべての人間が知っている言葉。ワレラガアル物ヲ欲シ要求スルトキ愛ハ人ニ善キコトヲ望ム…

——天才というあの奇妙な代物を持つ男にとって、物質的なものであれ精神的なものであれ、あらゆる体験の基準となるのは自分自身のイメージだ。この魅力が彼を引きつける。自分と血を分けたほかの男性たちのイメージには嫌悪をおぼえる。それらに、自分を予告したり反復したりする自然の醜悪な試みを見てとるんだ。

画像2：清書稿（ローゼンバッハ手稿）

[引用部の和訳は、ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』丸谷才一・永川玲二・高松雄一訳、集英社文庫ヘリテージシリーズ（2003）を参照した。]

スティーヴンは「その母を愛さずに娘を愛する男がいるだろうか？」と言った後に少し間を置く。するとミスタ・ベストはこうつぶやく「——祖父となる術（ミスタ・ベストはつぶやいた）」。このあと清書稿の該当箇所（最初の引用を参照）では、小説の初版には欠けている、二つのパラグラフが含まれている。ミスタ・ベストの割り込みには応答せず、スティーヴンはその一つ目のパラグラフの台詞をもって、それまで披露した反語を結ぶ。「——彼は娘のなかに、おのれの青春を思い返ししながら、別のイメージの生まれ変わりを見ないだろうか？」この部分が、スティーヴンの反語の最高潮にあたる。頓

呼法を駆使し「生まれ変わり」について述べているが、これはシェイクスピアの晩年の劇作の核心的なモチーフへの具体的な言及でもある。何よりも、ここでステューヴンは持説の披露を止める。彼は、静かに内省し自問自答する衝動に駆られるのだ。「自分の話していることがわかっているのか？ 愛。そう。すべての人間が知っている言葉。ワレラガアル物ヲ欲シ要求スルトキ愛ハ人ニ善キコトヲ望ム…」。こうしてから、彼は国立図書館の図書館員たちに向けた持説の披露を再開するのだ。

『ユリシーズ』の批判・共観版はこの二つのパラグラフを復元している。過去40年間において、この復元はジョイス批評において物議を醸した。その争点はこうだ。復元された二つ目のパラグラフにおいて、三つの英語の文が『ユリシーズ』のテキストとして読めるようになり、それは翻って、長い未完のラテン語の引用を誘発する。三つの英語の文は「自分の話していることがわかっているのか？ 愛。そう。すべての人間が知っている言葉。」である。

初版の『ユリシーズ』には、この短くも完結している二つのパラグラフは現れないので、どう理由でこれら二つのパラグラフが共に失われたか、そしてなぜ校訂を経て学術編集版で共に復元されるに至ったかを考察する必要がある。更に、この問題は仮によいとしても、この二つのパラグラフからなるテキストを、『ユリシーズ』全体に照らし合わせて吟味した際に立ち現れる、文脈的に難解な、特定の問題がある。ステューヴン・デダラスはこの場面、あるいは小説の他の場面において、「すべての人間が知っている言葉」を発するだろうか、ということだ。この具体的な問いは、読者あるいは批評家が決断すべき問題ではない。編者も、テキストをあるべき形にするために、この一節を割愛すべきか、それとも復元すべきかについて、単なる勘に基づいて判断できるものではない。

この問題を吟味し議論し判断する際、編者は校訂過程を司る原則に従うことになる。その作業とは、テキストの状況を包括的に精査し、解決すべき問題があるか否かを認識し審議することだ。それは、三つの文の有る無しの取捨選択に関わるものではなく、その二つのパラグラフの語りの全体の流れを、一つの一貫した議論を成す文章の固まりとして包括的に吟味し、校訂上の裁量を行使すべきか否かを判断することだ。編者は、清書稿と初版における二つのパラグラフの異同を包括的に精査する。執筆記録の物質的な伝承においては、差し当たって解決すべき問題は一つしかない。二つのパラグラフは、推敲の際に削除されたか、或いは一つの前稿から別の原稿に転写された際に、たまたま見落とされたのだろうか？ 後者に関しては、(単に)二者択一的で、問題となる異同の箇所に含まれるテキストの一部分あるいは全体の文脈や意味とは関係がない。

ここで、完成した挿話のテキストがどのような過程でタイプそして版組を担当した人物に渡されたかに注目して、ジョイスの作業の進め方について知っておくべきだろう。基本的に、清書稿はすぐタイプされ、校正されることになっていた。しかし、清書稿の完成から、印刷所で版組用にタイプ稿を整えるまで、時間差があった。この期間にジョイスは清書稿を推敲するための更なる着想を得た。それらは、既存の原稿のどこにどうやって挿入されたのだろうか？ ジョイスは、清書稿の元となった最終版の原稿に立ち返り、それに適宜改訂を施した。この仕上げ用原稿は現存しない。しかしながら、綿密

な校合を行い、清書稿（ローゼンバッハ手稿）の元となる「仕上げ用原稿」の原稿が存在したことが分析を経て検証できた。清書稿に物質的な形で残っているテキストの改訂は実際、失われた仕上げ用原稿からタイプ稿へと転写されたものであることは明らかである。タイプ稿はそして、初版の版組の底稿となった。タイプ稿では、清書稿に記録された当該パラグラフ二つが欠けている。かように、欠落が、結局、刊行されたテキストで生じてしまった次第である。

何故このようなことが起きたかを検証するために、タイプ稿へと転写された仕上げ用原稿を参照すべきだが、それは失われてしまっている。従って、テキストへの書き込みという具体的な物質的様態を基にとある仮説を立てなければならない。（現存する）ジョイスの手による清書稿において、印刷の段階で（最終的に）斜体になるべき語や表現に一貫してはっきりと下線が引かれているのは注目すべきことである。清書稿に斜体の指示を記入したのはジョイス自身に違いない。これ以降のテキストの派生過程には、前述した通り、空白がある。仕上げ用原稿——いったん文章は書き上げられたものの、清書稿を作った後でまた手が入られた——は失われている。当該テキストは、仕上げ用原稿に依拠したタイプ稿に現れる。タイプされたページには斜体を示す下線が引かれているが、著者の手によるものだとはいえない。

——マリーナは、スティーヴンが言った、嵐の子さ。ミランダは奇跡で、パーディタは失われたもの。失われたものが彼のもとに戻った。彼の娘の子供が。わがいとしい妻はとペリクリーズが言う、この乙女のようにであったと。その母を愛さずに娘を愛する男がいるだろうか？

——祖父となる術、とミスタ・ベストがつぶやいた。祖父とな……

——天才というあの奇妙な代物を持つ男にとって、物質的なものであれ精神的なものであれ、あらゆる体験の基準となるのは自分自身のイメージだ。この魅力が彼を引きつける。自分と血を分けたほかの男性たちのイメージには嫌悪をおぼえる。それらに、自分を予告したり反復したりする自然の醜悪な試みを見てとるんだ。

画像3：タイプ稿

[引用部の和訳は、ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』丸谷才一・永川玲二・高松雄一訳、集英社文庫ヘリテージシリーズ（2003）を参照した。]

タイプ稿の底稿となった仕上げ用原稿に関しては、ジョイス自身が清書稿と同様に仕上げ用原稿に下線を引いたと、自信を持って推論する他ない。よってタイプ稿に現れる「ミスタ・ベストがつぶやいた。祖父とな……」という一節は、（失われた）仕上げ用原稿にあるミスタ・ベストのつぶやきの終わりを示し、フランス語の部分に斜体を示す下線が引かれた、という推測に依拠することになる。この言いかけの文が5つの点で終わるのは注目に値する。次に（清書稿のテキストに従って）、清書稿に現れる（しかしタイプ

稿から1922年の初版に至るまで現れることのなかった)二つのパラグラフを検討しよう。清書稿に現れる二つ目のパラグラフは、「画像2」で見た通り、ラテン語の長い一節で締めくくられるが、それは斜体になっており、3つの点で途切れて終わる。

このような状況では、学術的編集の規律と書誌学的な証拠のみが、我々を一貫性のある検証と、その帰結としての解決方法へと導いてくれる。仕上げ用原稿に現れる形での二つのパラグラフ末尾の視覚的近似性——両者とも(推測になるが)斜体を示す下線が引かれ、点線で終わっている——を踏まえると、タイピストが一つのパラグラフからもう一つへと目線を移した際、両者とも下線が引かれて点線が続くので、異同を見落としただのだ。これは、テキストから独立した明快な解決方法だ。テキストの読解、理解、解釈の助けを必要とせず、ただ単に人為的なミスを正す。従って、スティーヴンが静かに紡ぐ三つの文は「スキュラとカリュブディス」を執筆し推敲する過程で、削除されることは一度も考慮されず、また言うまでもなく削除されることもなかったことは、全く疑う余地がない。それらはジョイスが書いた通りにこの箇所の一部として現れる。よって、それらは『ユリシーズ』の一部を成し、批判的な校訂を経て、小説の第九挿話が執筆された際の元の場所に復元されたのである。

ジョイスの小説『ユリシーズ』全体を考えた時に、元通り復元された「スキュラとカリュブディス」は、小説の第十五挿話「キルケ」のとある箇所と整合性を欠くように見えるかもしれない。スティーヴン・デダラスは死んだ母親と対峙し、悲痛な想いで言葉を交わす羽目になる。そのやり取りの中で、彼は母親にこうせがむ。「あの言葉を教えてよ、お母さん、いまはわかっているのなら。全ての人間が知っている言葉を。」(U 15: 4192-93) スティーヴンは——恐怖に震え、すっかり酪酊しているのだが——、死んだ母から、生前聞いて安堵することが出来なかったことを今教わろうとしているのだろうか？ それとも、彼は母に、死の向こう側から、生きている彼が今や確信を持っている言葉——それは「スキュラとカリュブディス」で静かに思考や感情を巡らせて確認して以来、確信を持つに至った言葉である——を発するように促しているのだろうか？ 「愛。そう。」我々ジョイスの読者は、それが究極的な確証となることを知っている。「そう(“Yes”)」、『ユリシーズ』最後の言葉だ。

それからあたしたちがアルヘシラスで船にのりおくれた夜見回りはランプを手におだやかに巡回していたそしてOあのおそろしいふかくおちこんで行ききゅうながれOそして海だ海だあるときはほのおのように赤くそしてかがやかしいゆう日そしてアラメダこうえんのいちじくの木yesそしていろいろのへんてこなちいさなとおりそして桃いろと青と黄いろの家いえそしてばらの花ぞのそれからジャスミンとセラニウムとサボテンそれからジブラルタル娘のころあたしは山にさく花yesあたしがばらの花を髪にさすとアンダルシアの娘たちがやるようにそれとも赤いのつけようかしらyesそして彼がムーア人の城へきの下であたしにキスしたし方そしてあたしはもうひとりと同じほど彼のことも好きだと思ったそしてあたしは目で彼をうながしたもういちどきいてyesすると彼はあたしにきいたねえどうかyes言ってく

[ガブラー]「自分の話していることがわかっているのか？」[小野瀬 訳]

れるかいyes山にさくぼくの花そしてあたしはまず彼をだきしめyesそして彼を引きよせたあたしの乳ふさにすっかりふれることができるように匂やかにyesそして彼の心ぞうはたか鳴っていてそしてyesあたしは言ったyesいいわよYes。

トリエステ——チューリッヒ——パリ

1914-1921

画像4：『ユリシーズ』巻末

[引用部の和訳は、ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』丸谷オー・永川玲二・高松雄一訳、集英社文庫ヘリテージシリーズ（2003）を参照した。]

「自分の話していることがわかっているのか？ 愛。そう。すべての人間が知っている言葉。」ステーションは「スキュラとカリュブディス」で、無言で自分に語りかける。学術的、テキスト生成批評的、そして編集的な観点から注意深くテキストを扱うことで、不慮の事故が起こりがちな出版前の伝承過程が介在しても、核となる重要な語に照らし合わせ、その共鳴を微調整することが可能となるのだ。

[ミュンヘン、2023年10月12日]